動作主および動作に関連する情報についての絵本場面での母子会話：縦断的研究

村　瀬　俊　樹

Mother-child conversation about information of agent and action during joint picture book reading: A longitudinal study

Toshiki Murase

キーワード：絵本場面，発話連鎖，乳幼児，動作主，述部

Abstract

This study investigated the sequential structure of mother-child conversations during joint picture-book reading; mother-child pairs were longitudinally observed when children were 20 and 27 months of age. Unlike previous studies focusing on the sequence of labeling utterances by mothers and children, this study examined the sequence of utterances about agent and action information in the pictures to clarify how children develop linguistically from the single-word stage to the syntactic stage.

Eighteen pairs of Japanese mothers and children were longitudinally observed when children were 20 and 27 months of age. The pairs were given a picture book depicting 24 animals engaged in everyday behavior. Maternal utterances preceding and following children's information-giving utterances on agent and action in the pictures were analyzed. Maternal utterances preceding children's information-giving utterances were coded as "information giving" and "information asking". Maternal responses following children's information giving were coded as "imitation", "elaborative information giving", "elaborative information asking", "instructional feedback", and "interpersonal feedback".

On average, the pairs initiated 70% of episodes by giving or asking for information about the agent. The pairs were divided into a more linguistically advanced children group and a less linguistically advanced children group based on the productive vocabulary size of each child at 20 months of age. From 20 to 27 months, the group of more linguistically advanced children decreased the proportion of agent information giving that imitated information given by mothers, while the less linguistically advanced group increased the proportion of this type of agent information giving. In both groups of children, information giving on action that imitated maternal information decreased from 20 to 27 months. In addition, in both groups of children, the proportion of imitation and elaborative information giving by mothers in response to children's information giving about the agent decreased from 20 to 27 months. In contrast, the proportion of elaborative information asking by mothers in response to children's information giving about the agent

＊島根大学法文学部

increased from 20 to 27 months. There was no difference in maternal responses to children's information giving on action at 20 and 27 months of child age.

The results indicate that children in this age range first acquired the ability to give information by imitating information given by their mothers; as their linguistic ability developed, they could then produce utterances without imitation. As the children developed, the mothers decreased imitation responses and changed the way they elaborated on their children's utterances about the agent; that is, instead of giving elaborative information themselves, they asked the children to give the elaborative information.

初期の語彙獲得は，その認知過程に関する実験的研究によって多くの知見が蓄積されてきた。しかしながら，子どもが，獲得したことばという行動を使って，まわりの環境に対してどのように適応しているのかということについてはあまり注目されてこなかった。

会話とは，ことばを用いた行動の連鎖であり，二者以上の人々の間で構成されるものである。このような会話において，子どもが相手のどのような先行発話文脈のもとでことばを用いているのか，また，子どもがことばを用いて会話に参加することに対して，会話を構成する相手はどのような反応をするのかといった発話連鎖を検討することは，他者との活動における子どもの行動の果たす役割を検討することとなる。したがって，このような発話連鎖の分析は，子どもが，ことばを用いて，会話という活動にどのような適応を示しているのかを検討することになると考えられる。

初期の語彙獲得期における絵本場面の親子の会話は，ラベリングを中心としてフォーマットを形成しているといわれている(Ninio & Bruner, 1978)。フォーマットという定型性を持つことは，会話という複雑な分析をしていく際に，その発達過程を明らかにしやすいという分析上の利点があることから，絵本場面における親子の会話の検討がなされてきた。

絵本場面の会話において，子どもは，親のどのような先行発話文脈のもとでラベリングを行っているのだろう。発達の最近接領域の考えにならえば，子どものラベリングも，他者からの援助のもとで達成されるものから，他者からの援助がなくとも達成されるものへと発達すると考えられる。ラベリングの先行発話に関して考えれば，子の月齢や言語能力の増大とともに，母親のラベリングという援助を受けて子がラベリングを遂行することから，そのような援助を受けずに子がラベリングを遂行するようになると考えられる。

日本の母子における絵本場面での会話を分析した研究結果では，このような傾向が確かめられている。すなわち，子どもによるラベリングの先行発話文脈については，日本の子どもは，母親からの同一情報を模倣してのラベリングの遂行を，月齢の増大とともに減少させていた（村瀬・マユー・小椋・山下・Dale, 1998; Murase, Dale, Ogura, Yamashita, & Mahieu, 2005)。

子どものラベリングに対する親の反応についてはどうだろうか。問題解決において，親は,子どもがあることができるようになると，より複雑な構造にそれを組み込もうとする「賭金を上げる(raising ante)」という方略をとると言われている(Bruner, 1981)。この考えにならうと，絵本場面における子どものラベリングに対して，親は，子の月齢や言語

能力の増大とともに，さらに精緻な情報に関する会話をするために，精緻的な情報を提供したり，精緻的な情報を請求するようになると考えられる。

日本の母子における絵本場面での会話を分析した研究結果では，これについてもその傾向が確かめられている。子のラベリングに対して，母親は，子どもの月齢や産出語彙数の増大とともに，精緻化情報提供や精緻化情報請求での反応を増大させていた（村瀬ら，1998；Murase et al.，2005）。

また，問題解決において，親は，年少の子どもに対しては，子どもが課題遂行をする上で自分でコントロールしなければならない自由度を減じるような足場作り(scaffolding)をすると言われている(Bruner，1981)。ラベリングに関して考えると，親が自らラベルを提供するというようにモデルを提示することは，子どものラベリングにとっての足場作りとなり，親がラベルを提供せずに子どもにラベルを請求することは，その足場を設けずに子どもからのラベリングを求めていることになる。このように考えると，親は，年少の子に対しては，自らラベリングを行うことで会話を始めることが多いと考えられるが，子の月齢や言語能力の増大とともに，自らがラベリングすることで会話を始める割合を減少させ，子どもにラベリングをさせようと情報請求することで会話を開始することを増大させると考えられる。

実際，日本の母親は子どもの月齢の増大に伴って，会話の開始を，自らがラベリングを提供するものから，子どもにラベリングなどの情報を請求するものへと変化させていた（村瀬ら，1998）。

村瀬ら(1998)，Murase et al.(2005)では，母子に与えられた絵本３冊のうち２冊までは個物が描かれている絵本であったため，ラベリング以外の情報を子が提供することは少なく，ラベリングに限って発話連鎖が分析された。初期の言語獲得期においては，母子の絵本読みでは個物を描いた絵本が多く使われ，会話の内容もラベリングが中心的なものであると考えられるが，一語発話から多語発話へと子どものことばの発達過程を考えた時，ラベリングだけではなく，動作や動作に関連する項など他の情報に関する発話の遂行も調べ，多くの種類の語を用いた事象の言語表現がどのような母子の発話連鎖の中でなされているのかを調べる必要がある。本研究では，「○○が××している」という発話がでやすいように，動物が何かをしている絵を描いた絵本を用意し，その絵本を母子が読む場面を分析することによって，動物の名称（動作主）と，動物の動作およびそれに関連する項（述部）についての情報を提供するときの母子の発話連鎖を分析する。

また，村瀬ら(1998)，Murase et al.(2005)は横断的研究であったため，母子の会話スタイルの安定性や，先行時点での母子の会話スタイルが後続時点での母子の会話スタイルや子どもの言語発達に及ぼす影響については検討することができなかった。子どもの発達は，養育者らとの相互作用に子が能動的に参加する中でなされるという考え方からは，ある時点で子どもが活動にどのような参加形態を示すのかということが，後の行動にどのような影響を及ぼすのかということを検討する必要がある。このためには，縦断的研究によって，ある時点における母子の会話のパターンを測定し，後の時点での母子の会話パターンや，子どもの言語能力との関連性を検討する必要がある。本研究では，絵本場面における母子の会話を縦断的に測定し，この問題について

も検討することとする。

方　　法

研究協力者

松江市在住の母子18組(男児8名,女児10名)を観察対象とした。子どもが20ヶ月，27ヶ月の時点で縦断的に観察した。20ヶ月観察時の子どもの月齢は20ヶ月0日～20ヶ月13日,27ヶ月観察時は26ヶ月29日～27ヶ月17日であった。子どもの出生順位は，第1子が7名，第2子が7名，第3子以降が4名であった。昼間の主な養育は，14名が家庭で母親によって行われており，4名は保育園において行われていた。

材料

市販の絵本ではなく，動物が何らかの行動をしている絵24枚をファイルにしたものを使用した。絵本の見開き右側にそれぞれの絵が描かれており，左側は白紙になっている。絵の内容は，猿が起きる，豚が服を着る，馬がパンを食べる，犬がミルクを飲む，ワニが歯を磨く，熊がうんちをする，あざらしがそうじをする，スカンクが靴を履く，亀が買い物をする，パンダがおんぶをする，牛がスケートをする，ネズミが砂遊びをする，羊が考える，キリンが手を洗う，鹿がご飯を食べる，ライオンが積み木をする，虎が座禅をする，いかが電話をする，ハリネズミがテレビを見る，猫がたかいたかいをする，象が体を洗う，かえるが星を見る，カバが泣く，うさぎが寝るである。

手続き

研究協力者母子は，子どもが20ヶ月，27ヶ月の時点で,1組ずつ島根大学法文学部の遊戯室に来室した。各時点で行われた観察手続きの概要は次の通りである。

観察の概要の説明を母親に対して行い，観察の実施と録画の承諾を得た。その後，着替え遊び場面，絵本場面，カテゴリー化課題，食事遊び場面，ファストマッピング課題の順に施行した。最後に，家庭での，いろいろな物についてのことばの聴取，いろいろな場面でのことばの使用についての質問が観察者から母親に対してなされた。時間の都合や子どもの機嫌などの関係から，遊戯室内で質問に対する答えが聴取できなかった場合は，質問紙を後日郵送してもらうよう依頼した。本研究は，この内，絵本場面での母子会話を分析したものである。なお，いろいろな物についてのことば，いろいろな場面でのことばの使用についての質問から測定した産出語彙数も分析に使用した。

絵本場面では，この場面用の絵ファイル１冊を手渡し，普段通りに自由に遊んでもらうようにと教示した。観察時間は，母子が絵本を読み始めてから７分間とした。

いろいろな物についてのことばに関しては，観察で使用した絵本にでてくる動物，着替え遊び場面や食事遊び場面で使用した用具に含まれる衣類・日用品・食器・食物を含み，小椋・山下・村瀬(1991)で用いられた初期言語発達インベントリーの項目を参考にして，20ヶ月時点では全部で82，27ヶ月時点では全部で112の対象について質問した。家庭でその対象についてのことばを話すか，話す場合どのような言い方をするかを母親より聴取した。

いろいろな場面でのことばの使用については，家庭で，様々な場面において，子が身振りで示すか，ことばを使用するか，ことばを使用する場合どのような言い方をするかに関する質問を，20ヶ月時点では62の場面について，27ヶ月時点では76の場面について母親よ

り聴取した。この質問は，成人の場合は一般的に動作や状態を表すことばを使用する場面がその多くをしめている。また，この質問の作成にあたっては，小椋・山下・村瀬(1991)で用いられた初期言語発達インベントリーの項目を参考にした。

いろいろな物についてのことば，いろいろな場面でのことばに関する質問項目に対して，母親によって挙げられた子どもの使うことばの異なり語彙数を子どもの産出語彙数とした。

分析単位

1つの絵に対する一連の発話を1エピソードとし，エピソード内の母子の発話と身振りをターンに分割した。さらに，一つのアイデアを表すものを1発話単位とし，ターンをさらに発話単位に分割した。

コード化

主要なコード化.　子どもと母親の発話単位のうち，絵に描かれていることに関連している情報を提供している発話を，情報提供とコード化した。また，情報提供のうち，絵本の各ページに描かれている，それぞれの動作を行っている動物の名前についての発話を動作主情報提供とした。動作主情報提供には擬音語擬態語による表現も含まれる（例,「おさるさん」,「ニャオー」)。また，絵本の各ページに描かれているそれぞれの動物が行っている動作（例,「起きた」,「うんちしてる」)，及び，動作の対象（例，馬がパンを食べている絵に対して「パン」）や動作の道具（例，鹿がスプーンで食事をしている絵に対して「スプーン」）などの項についての発話を述部情報提供とした。述部情報提供にも擬音語擬態語が含まれる（例,「お手手シュワシュワ」)。

また，子どもと母親の発話単位のうち，ある情報を伝える語を産出するよう相手に要求する発話を情報請求とした（例,「これ何？」,「何してる？」,「これは？」)。

母子による情報提供の順序パターン.　各エピソードにおいて，母子によって情報提供がなされる順序パターンを，子どもによる情報提供がなされているか，子どもによる情報提供に先立って母親による情報提供がなされているか，子どもまたは母親による情報提供に先立って母親による情報請求がなされているかによって，母提供（母が情報提供するのみ)，母請求→母提供（母が情報請求し，自分で情報提供するが，子は情報提供しない)，母提供→子提供（母が情報請求なしに情報提供し，子がその後で情報提供する)，母請求→母提供→子提供（母が情報請求して自分で情報提供し，子がその後情報提供する)，母請求→子提供(母が情報請求し，子が情報提供する)，子提供（子が母の情報請求や情報提供より先に情報提供する）に分類した。各エピソードごとに，最初の動作主情報，最初の述部情報が提供されるパターンを，それぞれこのカテゴリーを用いて分類した。また，動作主情報か述部情報かは区別せず，最初の情報提供がなされたパターンを，このカテゴリーを用いて分類した。それぞれの分類カテゴリーの例をTable 1に示す。

Table 1.　母子による情報提供の順序パターンの例

母提供	：母「くま」
母請求→母提供	：母「これ誰?」→母「くま」
母提供→子提供	：母「くま」→子「くま」
母請求→母提供→子提供	：母「これ誰?」→母「くま」→子「くま」
母請求→子提供	：母「これ誰?」→子「くま」
子提供	：子「くま」

子どもの情報提供に先行する母親の発話

子どもの動作主情報提供，述部情報提供の直前の母親のターンにおける発話を情報請求と同一情報提供にコード化した。情報請求は，先に定義した通り，ある情報を伝える語を産出するよう相手に要求する発話であり，動作主についての情報請求であるか，動作についての情報請求であるか，その他の情報請求であるかは問わない。同一情報提供は，子の提供した情報と同一の情報を母親が提供していた場合である（例，母「ライオンさんだよ」→子「ライオン」，母「お猿さん起きたよ」→子「起きた」）。情報請求と同一情報提供は多重コード化された。

子どもの情報提供に引き続く母親の反応

子どもの動作主情報提供，述部情報提供の直後の母親のターンにおける発話を，模倣，精緻化情報提供，精緻化情報請求，教示的フィードバック，関係的フィードバックというカテゴリーでコード化した。模倣情報提供は，子の提供した情報と同一の情報を母親が提供していた場合（例，子「ライオン」→母「ライオンさんだね」，子「起きた」→母「お猿さんおはよーって起きたね」），精緻化情報提供は，子が同一エピソード内で提供した情報とは異なる情報を母親が提供した場合（例，子「わに」→母「はみがきしてるねえ」，子「しかさん」→母「しかさんご飯食べてるよ」），精緻化情報請求は，子が同一エピソード内で提供した情報とは異なる情報を母親が請求した場合（例，子「うさぎ」→母「うさぎさん何してる？」，子「うーんてしてる」→母「だれが？」），教示的フィードバックとは，子どものラベリングに対して明確に肯定のフィードバックをしている場合（例，「そうだよ」，「あってるよ」，「よくできたね」），関係的フィードバックは，母子間の間主観性の確認をする発話（例，「ねえ」）と定義された。

結　　果

母子が各エピソードで情報提供をした割合

全エピソードのうちで，母子のいずれかが情報提供をした割合，母親が情報提供した割合，子が情報提供をした割合を，動作主情報，述部情報それぞれについて，各月齢別にTable 2にしめす。

母親が動作主情報，述部情報を提供したエピソードの割合は，子の月齢によって変わらないが，子が情報提供をしたエピソードの割合は，動作主情報も述部情報も，20ヶ月よりも27ヶ月の方が多くなっている（$F(1, 17) = 24.49$, $p < .001$; $F(1, 17) = 15.27$, $p < .01$）。子どもが1エピソードあたりに提供している情報の種類数を検討するために，１つのエピソードの中で動作主情報も述部情報も提供している場合は2，動作主情報または述部情報のどちらか一方のみを提供している場合は1，どちらの情報も提供していない場合は0として，情報提供種類数の全エピソードでの平均を調べた。20ヶ月よりも27ヶ月の方が1エピソードあたりの平均情報提供種類数は増えているが（$F(1, 17) = 42.48$, $p < .001$），1エピソードあたりの平均情報提供種類数が1以上の子どもは，20ヶ月で1名，27ヶ月で5名であった。また，動作主情報であるか述部情報であるか，その他の情報であるかを区別せず，母親が情報請求をしたエピソードの割合を検討したところ，20ヶ月よりも27ヶ月の方が情報請求をしたエピソードの割合は多くなっている（$F(1, 17) = 11.52$, $p < .01$）。

母親によるエピソードの開始方略

各エピソードが母親によって開始されたか子によって開始されたかを調べ，母親によっ

Table 2.　母子が情報提供をしたエピソードの割合と母親が情報請求をしたエピソードの割合の平均値（標準偏差）

	20ヶ月		27ヶ月		
情報提供エピソード率					
母子いずれかによる動作主情報提供率	0.61	(0.25)	0.70	(0.15)	*
母子いずれかによる述部情報提供率	0.49	(0.20)	0.47	(0.23)	
母親動作主情報提供率	0.60	(0.25)	0.64	(0.13)	
母親述部情報提供率	0.49	(0.21)	0.43	(0.22)	
子動作主情報提供率	0.24	(0.27)	0.48	(0.21)	***
子述部情報提供率	0.11	(0.13)	0.30	(0.21)	**
情報請求エピソード率					
母親情報請求率	0.48	(0.29)	0.70	(0.22)	**
子の1エピソードあたり平均情報提供種類数	0.35	(0.38)	0.78	(0.31)	***

***p < .001，**p < .01，*p < .05

Table3.　母親のエピソード開始方略の割合平均値（標準偏差）

	20ヶ月		27ヶ月		
母開始エピソード率	0.80	(0.23)	0.72	(0.25)	
母情報提供先行率	0.45	(0.29)	0.16	(0.10)	***
母情報請求先行率	0.50	(0.29)	0.72	(0.16)	**

***p < .001，**p < .01

て開始されたエピソードの内，情報請求先行（最初のターンで情報請求発話単位が情報提供発話単位より先にみられるか，最初のターンでは情報請求のみがみられる）の割合と情報提供先行（最初のターンで情報提供発話単位が情報請求発話単位より先にみられるか，最初のターンでは情報提供のみがみられる）の割合について，子どもの月齢を被験者内要因とする分散分析を行った。

情報請求先行率にも，情報提供先行率にも，子の月齢の主効果がみられ（$F(6, 59) = 8.96$，$p < .01$；$F(1, 17) = 20.41$，$p < .001$），20ヶ月よりも27ヶ月の方が，情報請求でエピソードを開始する割合が増大し，情報提供でエピソードを開始する割合が減少していた（Table 3）。

また，子どもの産出語彙数と母親のエピソード開始方略との相関を見たところ，20ヶ月時点では，情報提供先行率は子どもの産出語彙数と有意な負の相関を示し（$r = -.51$，$p < .05$），情報請求先行率は子どもの産出語彙数と正の相関を示す傾向があったが（$r = .46$，$p < .10$），27ヶ月時点では，情報提供先行率も情報請求先行率も，子どもの産出語彙数と有意な相関を示さなかった（$r = .17$；$r = -.07$）。

母子による情報提供の順序パターン

動作主情報，述部情報それぞれについて，少なくとも母子のいずれかによって情報提供がなされたエピソードについて，最初の情報がそれぞれどのような順序で提供されたかを，先に述べた情報提供の順序パターンのカテゴリーによって分類し，分析した。また，動作主情報か述部情報かは問わず，どちらかの情報が少なくとも母子のいずれかによって提供されたエピソードについて，最初の情報がどのような順序で母子によって提供されたかを同様の順序パターンのカテゴリーによって分類し，分析した。なお，最初に提供された情報は，20ヶ月時点も27ヶ月時点も平均70％が動作主情報であった。

それぞれのパターンの割合について，子どもの月齢を被験者内要因の独立変数として分

散分析を行ったところ，動作主情報については，母提供，母請求→母提供，母請求→母提供→子提供，母請求→子提供に主効果が見られ（$F(1,17) = 10.87$，$p < .01$；$F(1,17) = 4.73$，$p < .05$；$F(1,17) = 4.64$，$p < .05$；$F(1,17) = 11.71$，$p < .01$），述部情報については，母提供，母請求→子提供に主効果が見られ（$F(1,17) = 35.88$，$p < .001$；$F(1,17) = 33.45$，$p < .001$），最初の情報については，母提供，母請求→子提供に主効果が見られた（$F(1,17) = 24.03$，$p < .001$；$F(1,17) = 31.88$，$p < .001$）。これらの結果は，いずれの情報とも，20ヶ月から27ヶ月にかけて，母親が情報提供するのみであったエピソードの割合が減少し，母親の情報請求後に子が情報提供するというパターンを示すエピソードの割合が増大していることを示している。また，動作主情報については，母親が情報請求し自ら情報提供することで終わるエピソードの割合が減少し，母親が情報請求し自らが情報提供した後，子どもが情報提供するというパターンが増大している（Table 4）。

次に，それぞれの母子における各パターンの割合と，子どもの産出語彙数との相関関係を調べた。

全体として，20ヶ月時点の方が，情報提供の順序パターンと子どもの産出語彙数との間に関連性が見られる。母親が情報提供するのみのエピソードの割合は，子どもの産出語彙数と負の相関を示し，母親が情報請求をした後子どもが情報提供をするパターンは子どもの産出語彙数と正の相関を示している。また，母親が情報請求し自らが情報提供した後，子どもが情報提供しているエピソー

Table 4.　母子による情報提供の順序のパターンの割合（標準偏差）

	20ヶ月		27ヶ月		
動作主情報提供					
母提供	0.44	(0.30)	0.23	(0.18)	**
母請求→母提供	0.23	(0.26)	0.11	(0.12)	*
母提供→子提供	0.06	(0.09)	0.10	(0.08)	
母請求→母提供→子提供	0.09	(0.18)	0.16	(0.12)	*
母請求→子提供	0.11	(0.14)	0.26	(0.17)	**
子提供	0.07	(0.14)	0.14	(0.11)	
述部情報提供					
母提供	0.67	(0.22)	0.29	(0.20)	***
母請求→母提供	0.11	(0.13)	0.09	(0.10)	
母提供→子提供	0.11	(0.15)	0.08	(0.09)	
母請求→母提供→子提供	0.05	(0.09)	0.09	(0.10)	
母請求→子提供	0.04	(0.06)	0.40	(0.26)	***
子提供	0.03	(0.07)	0.06	(0.09)	
最初の情報提供					
母提供	0.47	(0.29)	0.19	(0.13)	***
母請求→母提供	0.19	(0.21)	0.11	(0.13)	+
母提供→子提供	0.08	(0.09)	0.09	(0.09)	
母請求→母提供→子提供	0.09	(0.17)	0.14	(0.10)	
母請求→子提供	0.10	(0.13)	0.34	(0.17)	***
子提供	0.07	(0.13)	0.14	(0.11)	

***$p < .001$，**$p < .01$，*$p < .05$，+$p < .10$

Table 5.　情報提供の順序パターンの割合と子の産出語彙数との相関係数

	20ヶ月		27ヶ月	
動作主情報提供				
母提供	−0.46	+	−0.54	*
母請求→母提供	−0.45	+	−0.10	
母提供→子提供	0.38		0.11	
母請求→母提供→子提供	0.57	*	0.11	
母請求→子提供	0.43	+	0.52	*
子提供	0.41	+	−0.03	
述部情報提供				
母提供	−0.77	***	0.15	
母請求→母提供	−0.03		−0.26	
母提供→子提供	0.48	*	−0.20	
母請求→母提供→子提供	0.55	*	0.19	
母請求→子提供	0.52	*	−0.07	
子提供	0.27		0.13	
最初の情報提供				
母提供	−0.59	*	−0.45	+
母請求→母提供	−0.40	+	−0.31	
母提供→子提供	0.32		0.07	
母請求→母提供→子提供	0.60	**	0.06	
母請求→子提供	0.52	*	0.48	*
子提供	0.41	+	0.07	

***$p < .001$，**$p < .01$，*$p < .05$，+$p < .10$

ドの割合は，20ヶ月時点で，子どもの産出語彙数と正の相関を示している(Table 5)。

子の情報提供遂行の先行文脈

子による情報提供が，どのような発話連鎖のもとで遂行されているのかを分析した。動作主情報，述部情報それぞれについて，子が情報提供をしているエピソード数が2よりも小さい母子を分析から除外した。この結果，動作主情報については11組，述部情報については10組が分析対象となった。

各エピソードの中で，子による最初の動作主情報提供，述部情報提供がなされたターンの直前の母親のターンを分析した。子によって情報提供がなされたエピソードの内，直前の母親ターンにおいて子と同一情報提供がなされていたもの，情報請求がなされていたものの割合について，子どもの月齢を被験者内要因の独立変数として分散分析を行ったところ，村瀬ら(1998)とは異なり，動作主情報については，いずれも月齢による違いは見られなかったが，述部情報については月齢の主効果が見られ($F(1,9) = 11.78$, $p < .01$; $F(1,9) = 15.98$, $p < .01$)，20ヶ月から27ヶ月にかけて，母親の同一情報提供を受けての子の述部情報提供の割合が減少し，母親の情報請求を受けての子の述部情報提供の割合が増大していた。動作主情報と述部情報に関わらず，いずれかの情報を子が提供しているエピソードが2以上見られる母子14組について，子による最初の情報提供の直前の母親ターンの分析を同様に行ったが，同一情報提供についても情報請求についても，子の月齢による違いは見られなかった(Table 6)。

子による動作主情報の先行文脈の結果が村瀬ら(1998)と異なるのはなぜかを検討するために，子どもの産出語彙数を要因に組み込んで再分析を行った。動作主情報の先行文脈に関する分析の対象となった11名の子どもの20ヶ月時点の産出語彙数の平均73.0で研究協力者母子を2分し，20ヶ月時点での産出語彙数（多・少）×子どもの月齢（20ヶ月・27ヶ月）の混合計画の2要因分散分析を行ったところ，20ヶ月時点での産出語彙数と子どもの月齢の交互作用が見られた($F(1,9) = 14.92$, $p < .01$)。産出語彙数群別の子どもの月齢の単純効果は，語彙数が多い群にも少ない群にも見られた。すなわち，語彙数が多い群では，20ヶ月から27ヶ月にかけて，母親の同一情報提供を受けての動作主情報提供が減少するが，語彙数が少ない群では，20ヶ月から27ヶ月にかけて，母親の同一情報提供を受けての動作主情報提供が増大していた(Table

Table 6.　子どもの情報提供の直前の母親ターンにおける各発話の割合（標準偏差）

	20ヶ月		27ヶ月		
動作主情報提供					
同一情報提供	0.30	(0.34)	0.36	(0.15)	
情報請求	0.46	(0.31)	0.50	(0.20)	
述部情報提供					
同一情報提供	0.73	(0.21)	0.34	(0.30)	**
情報請求	0.20	(0.21)	0.61	(0.22)	**
最初の情報提供					
同一情報提供	0.46	(0.32)	0.37	(0.15)	
情報請求	0.37	(0.31)	0.49	(0.21)	

最初の情報提供n=14,　動作主情報提供n=11,
述部情報提供n=10,　**$p < .01$

Table 7.　20ヶ月時点での子どもの産出語彙数別に見た動作主情報に先行する母親の同一情報提供の割合（標準偏差）

	20ヶ月		27ヶ月	
20ヶ月時点での産出語彙数少	0.11	(0.27)	0.42	(0.06)
20ヶ月時点での産出語彙数多	0.54	(0.27)	0.29	(0.19)

7)。母親の情報請求による先行文脈の割合は，20ヶ月時点での子どもの産出語彙数を要因に組み込んでも有意な結果は得られなかった。

動作主情報と述部情報に関わらず，どちらか最初の情報提供の先行文脈についても，分析の対象となった14名の子どもの20ヶ月時点の産出語彙数の平均65.4で研究協力者母子を2分し，20ヶ月時点での産出語彙数（多・少）×子どもの月齢（20ヶ月・27ヶ月）の混合計画の2要因分散分析を行ったところ，20ヶ月時点での産出語彙数と子どもの月齢の交互作用が有意水準に近いレベルであった($F(1, 12) = 3.26$, $p < .10$)。産出語彙数群別の子どもの月齢の単純効果は，語彙数が多い群にのみ見られた。すなわち，語彙数が多い群では，20ヶ月から27ヶ月にかけて，母親の同一情報提供を受けての動作主情報提供が減少する傾向があるが，語彙数が少ない群では，20ヶ月から27ヶ月にかけて，母親の同一情報提供を受けての情報提供の割合に違いは見られなかった(Table 8)。母親の情報請求による先行文脈の割合は，20ヶ月時点での子どもの産出語彙数を要因に組み込んでも有意な結果は得られなかった。

また，子どもの情報提供に先行する母親の発話の割合と，子どもの産出語彙数との相関関係を分析したところ，子の述部情報提供に先行して母親が情報請求をしている割合が，20ヶ月時点において，子の産出語彙数と有意な正の相関が見られた(Table 9)。

子の情報提供遂行後の母親の発話

子による情報提供に対して，母親がどのような反応をしているのかを分析した。動作主情報，述部情報それぞれについて，子が情報提供をしているエピソード数が2よりも小さい母子を分析から除外し，動作主情報については11組，述部情報については10組が分析対象となった。動作主情報と述部情報に関わらず，いずれかの情報を子が提供しているエピソードが2以上見られる母子14組について，エピソード内での子による最初の情報提供に対する母親の反応も分析した。

子によって情報提供がなされたエピソードの内，直後の母親ターンにおいて，模倣，精緻化情報請求，精緻化情報提供，教示的フィードバック，関係的フィードバックがなされていたものの割合について，子どもの月齢を被験者内要因の独立変数とする分散分析を行ったところ，動作主情報提供については，模倣，精緻化情報請求，精緻化情報提供に月齢の主効果が見られ($F(1, 10) = 16.95$, $p < .01$; $F(1, 10) = 5.63$, $p < .05$; $F(1, 10) = 16.67$,

Table 8.　20ヶ月時点での子どもの産出語彙数別に見た最初の情報提供に先行する母親の同一情報提供の割合（標準偏差）

	20ヶ月		27ヶ月	
20ヶ月時点での産出語彙数少	0.42	(0.38)	0.46	(0.11)
20ヶ月時点での産出語彙数多	0.52	(0.24)	0.25	(0.12)

Table 9.　子どもの情報提供に先行する母親の発話の割合と子どもの産出語彙数との相関係数

	20ヶ月	27ヶ月
動作主情報提供		
同一情報提供	0.42	−0.16
情報請求	−0.37	0.04
述部情報提供		
同一情報提供	−0.33	0.12
情報請求	0.83 **	−0.39
最初の情報提供		
同一情報提供	−0.05	−0.30
情報請求	0.04	0.26

最初の情報提供n=14,　動作主情報提供n=11,
述部情報提供n=10, **$p < .01$

$p < .01$)，20ヶ月よりも27ヶ月の方が，母親は精緻化情報請求による反応を増大させ，模倣や精緻化情報提供による反応を減少させていた。一方，述部情報提供については，子の月齢の主効果が見られたものはなかった。最初の情報提供については，ほぼ動作主情報提供と同様の傾向を示していた（Table 10)。

子どもの情報提供に対する母親の反応の割合についても，子どもの産出語彙数との相関関係を分析した。子の動作主情報提供に対して母親が精緻化情報請求をする割合，述部情報提供に対して母親が精緻化情報提供をする割合は，20ヶ月時点において，子の産出語彙数と有意な正の相関を示していた(Table 11)。

Table 10.　子どもの情報提供の直後の母親ターンにおける各発話の割合（標準偏差）

	20ヶ月		27ヶ月		
動作主情報提供					
模倣	0.89	(0.13)	0.66	(0.18)	**
精緻化情報請求	0.16	(0.15)	0.34	(0.24)	*
精緻化情報提供	0.39	(0.17)	0.16	(0.13)	**
教示的フィードバック	0.05	(0.10)	0.05	(0.09)	
関係的フィードバック	0.16	(0.23)	0.12	(0.12)	
述部情報提供					
模倣	0.66	(0.21)	0.59	(0.30)	
精緻化情報請求	0.10	(0.21)	0.20	(0.26)	
精緻化情報提供	0.17	(0.21)	0.24	(0.21)	
教示的フィードバック	0.05	(0.16)	0.12	(0.26)	+
関係的フィードバック	0.32	(0.33)	0.28	(0.32)	
最初の情報提供					
模倣	0.86	(0.12)	0.58	(0.24)	**
精緻化情報請求	0.12	(0.16)	0.31	(0.22)	**
精緻化情報提供	0.27	(0.20)	0.17	(0.12)	+
教示的フィードバック	0.04	(0.11)	0.04	(0.08)	
関係的フィードバック	0.23	(0.28)	0.11	(0.13)	

最初の情報提供n=14,　動作主情報提供n=11,
述部情報提供n=10，***$p<.001$，**$p<.01$，*$p<.05$，+$p<.10$

Table 11.　子どもの情報提供に対する母親の反応の割合と子どもの産出語彙数との相関係数

	20ヶ月		27ヶ月	
動作主情報提供				
模倣	−0.12		−0.27	
精緻化情報請求	0.78	**	0.17	
精緻化情報提供	0.15		−0.13	
教示的フィードバック	−0.32		−0.10	
関係的フィードバック	−0.45		0.41	
述部情報提供				
模倣	−0.49		−0.28	
精緻化情報請求	0.48		0.47	
精緻化情報提供	0.64	*	0.52	
教示的フィードバック	−0.42		−0.06	
関係的フィードバック	−0.54		0.25	
最初の情報提供				
模倣	−0.35		−0.01	
精緻化情報請求	0.80	***	0.50	+
精緻化情報提供	0.56	*	0.35	
教示的フィードバック	−0.17		0.16	
関係的フィードバック	−0.49	+	0.20	

最初の情報提供n=14,　動作主情報提供n=11,
述部情報提供n=10，***$p<.001$，**$p<.01$，*$p<.05$，+$p<.10$

母子による情報提供の順序パターンの月齢間の関係

20ヶ月時点における母子による情報提供の順序パターンが，27ヶ月時点における母子による情報提供の順序パターンとどのような関係にあるのかを検討した。動作主情報と述部情報に関わらず最初の情報提供について，20ヶ月時点での各パターンの割合と27ヶ月時点での各パターンの割合の単純相関係数をTable 12に示す。20ヶ月時点での母提供のみの割合は，27ヶ月時点での母提供のみの割合と正の相関があり，20ヶ月時点での母請求→母提供の割合は，27ヶ月時点での母請求→母提供と正の相関があった。また，20ヶ月時点での母請求→母提供→子提供は，27ヶ月時点での母請求→子提供と正の相関があった。

情報提供の順序パターンは子どもの産出語彙数と関連があるため，両時点間での単純相関は，研究協力者母子の情報提供の仕方の個人差を反映したものではなく，子どもの語彙発達を反映

したものに過ぎないかもしれない。そこで，20ヶ月時点と27ヶ月時点における子どもの産出語彙数をコントロールして，20ヶ月時点と27ヶ月時点での情報提供の順序パターンの割合の偏相関係数を求め，Table 13に示した。

その結果，母請求→母提供というパターンは，子どもの語彙数をコントロールした場合も，20ヶ月と27ヶ月で有意な正の偏相関がみられた。また，母請求→母提供→子提供についても，20ヶ月と27ヶ月で有意な正の偏相関が見られた。一方，単純相関では関係の見られた20ヶ月時点での母請求→母提供→子提供と27ヶ月時点での母請求→子提供は，子どもの語彙数をコントロールした場合，有意な偏相関は見られなかった。

20ヶ月時点での母子の発話連鎖と27ヶ月時点での子の情報提供に関する先行発話文脈の関連性

20ヶ月時点での，子の最初の情報提供（動作主情報と述部情報に関わらず）に先行する母親の発話の割合，子の最初の情報提供（動作主情報と述部情報に関わらず）に対する母親の反応の割合と，27ヶ月時点での子の最初の情報提供（動作主情報と述部情報に関わらず）に先行する母親の発話の割合との関連性を調べた。

まず，それらの変数間の単純相関を調べ，次に，20ヶ月時点での子どもの産出語彙数をコントロールした偏相関係数を調べた。20ヶ月時点での子の産出語彙数をコントロールした偏相関係数において，20ヶ月時点で子の情報提供に母親が模倣をしている割合と，27ヶ月時点で母親の情報請求を受けての子の情報提供の割合に負の相関がみられた。また，20ヶ月時点で子の情報提供に母親が教示的フィードバックをしている割合と，27ヶ月時点で母親の情報請求を受けての子の情報提供の割合にも正の偏相関が見られたが，これは1組の母子のデータが大きく外れていることの影響を受けたものであり，一般的な傾向とみなすことはできない(Table 14)。

Table 12.　**最初の情報提供の順序パターンの割合20ヶ月時と27ヶ月時の相関係数**

	27ヶ月 母提供	27ヶ月 母請求 →母提供	27ヶ月 母提供 →子提供	27ヶ月 母請求 →母提供 →子提供	27ヶ月 母請求 →子提供	27ヶ月 子提供
20ヶ月母提供	0.50*	−0.14	0.09	−0.06	−0.36	0.08
20ヶ月母請求→母提供	0.22	0.58*	−0.18	−0.09	−0.31	−0.22
20ヶ月母提供→子提供	−0.23	−0.24	−0.01	0.26	0.10	0.17
20ヶ月母請求→母提供→子提供	−0.50*	−0.08	−0.24	0.34	0.54*	−0.24
20ヶ月母請求→子提供	−0.50*	−0.18	0.15	−0.13	0.28	0.36
20ヶ月子提供	−0.15	−0.20	0.28	−0.21	0.23	0.01

*p ＜ .05

Table 13.　**子どもの産出語彙数をコントロールした最初の情報提供の順序パターンの割合20ヶ月時と27ヶ月時の偏相関係数**

	27ヶ月 母提供	27ヶ月 母請求 →母提供	27ヶ月 母提供 →子提供	27ヶ月 母請求 →母提供 →子提供	27ヶ月 母請求 →子提供	27ヶ月 子提供
20ヶ月母提供	0.29	−0.44	0.13	−0.08	−0.01	0.17
20ヶ月母請求→母提供	−0.01	0.58*	−0.28	−0.23	0.00	−0.20
20ヶ月母提供→子提供	−0.07	−0.18	0.04	0.39	−0.22	0.15
20ヶ月母請求→母提供→子提供	−0.27	0.15	−0.29	0.50*	0.24	−0.37
20ヶ月母請求→子提供	−0.32	0.00	0.15	−0.17	−0.03	0.38
20ヶ月子提供	0.09	−0.09	0.34	−0.18	−0.08	−0.03

*p ＜ .05

Table 14.　20ヶ月時点での母子の発話連鎖と27ヶ月時点での子の情報提供に関する先行発話文脈の関連性

	27ヶ月　母の同一情報提供を受けて遂行				27ヶ月　母の情報請求を受けて遂行			
	単純相関		偏相関		単純相関		偏相関	
20ヶ月直前同一情報提供	0.05		0.03		0.20		0.24	
20ヶ月直前情報請求	−0.17		−0.20		−0.02		−0.03	
20ヶ月直後模倣	0.54		0.44		−0.74	**	−0.70	**
20ヶ月直後精緻化情報請求	−0.71	**	−0.38		0.46		0.28	
20ヶ月直後精緻化情報提供	−0.40		−0.04		0.33		0.16	
20ヶ月直後教示フィードバック	−0.07		−0.25		0.59	*	0.72	**
20ヶ月直後関係フィードバック	0.18		−0.23		−0.09		0.12	

Table 15.　20ヶ月時点での会話のパターンと27ヶ月時点での子どもの言語発達指標との関連性

	27ヶ月産出語彙数				27ヶ月1エピソードあたり子平均情報提供			
	単純相関		偏相関		単純相関		偏相関	
20ヶ月時点での母子の発話連鎖								
20ヶ月直前母同一情報	−0.27		−0.39		−0.07		0.16	
20ヶ月直前母情報請求	0.35		0.54	+	0.35		0.49	
20ヶ月直後母模倣	−0.25		0.06		−0.53	+	−0.28	
20ヶ月直後母精緻化請求	0.65	*	0.02		0.67	**	0.09	
20ヶ月直後母精緻化提供	0.67	**	0.46		0.56	*	0.09	
20ヶ月直後母教示フィードバック	−0.09		0.08		0.18		−0.07	
20ヶ月直後母関係フィードバック	−0.71	**	−0.61	*	−0.58	*	−0.48	
20ヶ月時点での母子による情報提供の順序パターン								
20ヶ月母請求→母提供	−0.20		0.35		−0.32		−0.11	
20ヶ月母請求→母提供→子提供	0.50	*	−0.07		0.56	*	−0.01	
20ヶ月母提供	−0.58	*	−0.17		−0.45	+	0.05	
20ヶ月母提供→子提供	0.16		−0.27		0.21		−0.05	
20ヶ月母請求→子提供	0.54	*	0.20		0.50	*	0.37	
20ヶ月子提供	0.29		−0.15		0.12		−0.24	

$^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, $^{+}p < .10$

を調べた。

まず，それらの変数間の単純相関を調べ，次に，27ヶ月時点の子どもの産出語彙数との関連性では20ヶ月時点での子どもの産出語彙数をコントロールした偏相関係数，27ヶ月時点での子どもの1エピソードあたりの平均情報提供数については20ヶ月時点での子どもの1エピソードあたりの平均情報提供数をコントロールした偏相関係数を調べた。

その結果，単純相関係数では，20ヶ月時点で母親が子どもの最初の情報提供に対して精緻化情報提供，精緻化情報請求をする割合が高いほど，27ヶ月時点で子どもの産出語彙数や1エピソードあたりの情報提供数が多くなること，20ヶ月時点で母親が情報請求し自ら情報提供した後子が情報提供する割合，母親が情報請求し子が情報提供する割合が高いほど，27ヶ月時点で子どもの産出語彙数や1エピソードあたりの情報提供数が多くなること，20ヶ月時点で母親が情報提供をするのみであった割合が高いほど27ヶ月時点で子どもの産出語彙数や1エピソードあたりの情報提供数が少なくなるという関係が見られたが，これらはいずれも20ヶ月時点での子

20ヶ月時点での会話のパターンと27ヶ月時点での子どもの言語発達との関係

20ヶ月時点で母子がどのような会話を行っているかということが，27ヶ月時点での子どもの言語発達にどのような関係を持っているかを検討した。20ヶ月時点での，子どもの最初の情報提供（動作主情報と述部情報に関わらず）に先行する母親の発話の割合，子どもの最初の情報提供（動作主情報と述部情報に関わらず）に対する母親の反応の割合，母子による最初の情報提供（動作主情報と述部情報に関わらず）の順序パターンと，27ヶ月時点での子どもの産出語彙数，子どもの1エピソードあたり平均情報提供種類数との関連性

どもの言語発達をコントロールした場合は有意水準には達しなかった。20ヶ月時点で子どもの情報提供に先行して母親が情報請求をしている割合と27ヶ月時点での子どもの産出語彙数との間には，20ヶ月時点での子どもの産出語彙数をコントロールした場合，有意水準に近い正の偏相関が見られた。20ヶ月時点で子どもの情報提供に関係的フィードバックで応答する割合は，27ヶ月時点での産出語彙数と負の相関関係を示しているが，これは1組の母子のデータが大きく外れている影響を受けたものであり，一般的な傾向とみなすことはできない(Table 15)。

考　　察

母親のエピソード開始方略

村瀬ら（1998）と同様に，子どもの月齢の増大とともに，母親はエピソードの開始を，情報提供を先行するものから情報請求を先行するものへと変化させていた。つまり，子どもの発達とともに，足場作りの度合いを減少させていることが本研究においても確認された。

母子による情報提供の順序パターン

母子による情報提供の順序パターンは，動作主情報についても述部情報についても，20ヶ月から27ヶ月にかけて，母親が情報提供をするのみのエピソードの割合は減少し，母親が情報請求した後に子が情報提供をしたエピソードの割合は増大していた。また，最初の情報提供の多くを占める動作主情報については，母親が情報請求し自ら情報提供するのみのエピソードの割合は減少し，母親が情報請求し自ら情報提供したのち子が情報提供するエピソードの割合は増大していた。この後者2つのタイプは，母親が情報請求をして，子どもが答えないか誤った反応をした場合，母親が正しい反応のモデルを示し，それに対して子どもが正しい反応を模倣した場合（母請求→母提供→子提供）としなかった場合（母請求→母提供）である。20ヶ月時点では，母親が正しくモデル提示をしても，子どもはそれをうまく模倣することができないことも多いが，27ヶ月になると母親の情報請求に対しては正しく答えられなかった場合でも，母親がモデルを提示するとそれを模倣するようになる場合が多くなっていると言える。述部情報提供に関してはこのような傾向が見られないのは，述部情報は動作主情報よりも後に提供されることが多く，動作主情報の提供の仕方がどのようなものであるかによって影響を受けるからであろう。

子どもの産出語彙数と情報提供の順序パターンの割合の関係を調べた結果は，総じて，20ヶ月時点の方が27ヶ月時点よりも有意な相関が見られているが，子どもの月齢の増大とともに割合が増大していたものは，子どもの産出語彙数と正の相関を示し，子どもの月齢の増大とともに割合が減少していたものは，子どもの産出語彙数と負の相関を示している。すなわち，母が情報提供しているのみ，母が情報請求し自ら情報提供しているのみのエピソードの割合は，子どもの産出語彙数と負の相関を示す傾向があり，母親の情報請求の後子どもが情報提供する，母親が情報請求し自ら情報提供した後子どもが情報提供するエピソードの割合は，子どもの産出語彙数と正の相関を示している。子どもの月齢や語彙能力の増大とともに，母親のみが情報提供をしていたパターンが減少し，母親が情報請求し子がすぐに情報提供で答えるか，すぐには答えなくとも母親がモデルを提供すればそれを模倣して子も情報提供するパターンが増大

しているといえる。

子どもの情報提供遂行に先行する文脈

村瀬ら(1998)，Murase et al.(2005)では，日本の母子が絵本場面において行っている会話において，子は，月齢の増大，産出語彙数の増大とともに，母親のラベリングを模倣するという形でのラベリング遂行の割合を減少させていた。しかしながら,本研究では,述部情報については20ヶ月から27ヶ月にかけて，母親の述部情報を模倣しての子の情報提供の割合は減少していたが，動作主情報については，20ヶ月時点で産出語彙数が多い子どもの場合は20ヶ月から27ヶ月にかけて母親の動作主情報提供を模倣して子が情報提供する割合が減少する傾向が見られたが，産出語彙数が少ない子どもでは，むしろ20ヶ月から27ヶ月にかけて，母親の動作主情報提供を模倣して子が情報提供する割合は増加する傾向が見られた。

このような食い違いが見られたのは，用いた絵本の内容によるのではないかと考えられる。村瀬ら(1998)，Murase et al.(2005)では個物が描かれた絵本が3冊のうち2冊を占めており,ラベリングをする以外の言語行動を選択する余地は少ないが，本研究では動物が動作をしている絵であり，動作主の動物名を述べるか,述部に言及するか2つの言語行動をとる選択肢があった。したがって,本研究の子どもにとっては，母親が動作主情報を請求しても述部情報を提供してしまう可能性があり，このことが本研究の子どもにとって，動作主情報を提供することが村瀬ら(1998)，Murase et al.(2005)の子どもにとってラベリングを提供するよりも困難な課題となっていた可能性がある。

順序パターンの分析で，動作主情報については，母請求→母提供→子提供のパターンの割合が増大していたこととも考え合わせると，母親の同一情報提供を模倣するという形で子が情報提供をするのは，子どもにとってまったくの初期の情報提供遂行の仕方ではなく，母親のことばを模倣できるある程度の語彙能力を前提とした上で見られる遂行のパターンではないかと考えられる。つまり,母親の同一情報提供を受けての子どもの情報提供の割合は，子どもの語彙力の発達とともに逆U字型を示すのではないかと思われる。

ただ，本研究では，述部情報提供については，語彙数の多い子どもも少ない子どもも，20ヶ月時点で母親の同一情報提供を模倣する形で提供する割合が高く，27ヶ月になるとそれが減少していた。この結果は，本研究の課題の難しさでは説明できない。母子によって異なる発話のスタイルがあり，語彙数の少ない子は，述部情報については20ヶ月時点でも比較的発話をする傾向があり，母親の模倣も見られたのかもしれない。この点は明確ではないので，今後さらに検討する必要がある。

子の情報提供に対する母親の反応

子の情報提供に対する母親の反応については，動作主情報の提供に関しては，20ヶ月から27ヶ月にかけて，精緻化情報請求が増大しており，子どもの産出語彙数との関係においても，子の産出語彙数が多いほど精緻化情報請求をしている傾向が見られた。この結果は，Murase et al.(2005)と整合的なものであり，子どもの発達とともに精緻化情報請求を行ってさらに複雑な構造に子どもの発話を組み込んで行こうとする傾向は，安定した傾向として存在すると考えられる。

母親による精緻化情報提供については，村瀬ら(1998)と異なり,動作主情報については,

20ヶ月から27ヶ月にかけて減少していた。本研究で用いた絵本は，動物が動作をしている絵が描かれており，動作主の命名後にも述部への言及がなされやすい絵本であると考えられる。個物が描かれた絵本を用いた村瀬ら(1998)では，情報の提供であれ情報の請求であれ，精緻化情報に言及すること自体が母親にとっての賭け金を上げる行為になっていたのだが，本研究の絵本では，精緻化情報に言及すること自体は比較的容易なので，それを情報提供という形態で行うか情報請求という形態で行うかが，母親の賭け金を上げる方略と関係していると考えられる。すなわち，子どもが動作主情報を提供したのに対して，20ヶ月時点では母親は自ら情報を提供して精緻化情報に言及していたのだが，27ヶ月になると子どもに情報請求をして精緻化情報に言及させようと，さらに高度なことを子どもに要求するようになっているのだと考えられる。

村瀬ら(1998)，Murase et al.(2005)では明確な結果ではなかったが，本研究では，模倣も20ヶ月から27ヶ月にかけて減少していた。母親は子どもの月齢が大きくなるとその発話をくり返さずに次の話題へ進むと考えられる。ただし，子どもの構音の正確さの程度が統制されていないので，20ヶ月時点での母親が子どもの構音の不十分さを補おうとして模倣をしている可能性は本研究でも残る。

母子による情報提供パターンの月齢間の関係

本研究は縦断的研究であるので，20ヶ月時点での母子の情報提供のパターンが27ヶ月時点での母子の情報提供のパターンとどのように関連しているのかを検討した。月齢間の関係を見た結果では，子どもの産出語彙数をコントロールしても，母親が情報請求し自ら情報提供するパターン，母親が情報請求し自ら情報提供した後子が情報提供するパターンは，20ヶ月時点と27ヶ月時点で正の関連性があった。このようなパターンで会話を行うことは，この月齢間では安定した会話パターンの個人差であると考えることができる。

20ヶ月時点での，母親が情報請求し自ら情報提供した後子が情報提供するパターンの割合は，27ヶ月時点での，母親の情報請求後に子が情報提供するパターンの割合と，単純相関では正の相関が見られた。したがって，20ヶ月時点で，母親が情報請求し，子どもが正しい情報を提供しないので母親が情報提供をし，子どもがそれを模倣するというパターンをとっていた母子は，7ヶ月後に母親の情報請求に対して子どもが正しい情報提供をするようになる傾向があるといえる。しかしながら，子どもの産出語彙数をコントロールした偏相関では，この関連性は有意ではなくなっているので，この関係は，子どもの語彙発達のレベルに規定されている可能性があり，20ヶ月時点でそのような会話のパターンを経験していることが，27ヶ月時点で母親の情報請求に対して子が情報提供できるようになることにつながると因果関係を主張することは本研究からはできない。

20ヶ月時点での発話連鎖と27ヶ月時点で子が情報提供を遂行する文脈の関係

27ヶ月時点で子どもがどのような先行発話文脈のもとでラベリングを遂行するのかということと，20ヶ月時点における子どもの情報提供に関する発話連鎖のパターンとの関連性も，子どもの産出語彙数をコントロールした偏相関ではほとんど有意なものは見られなかった。20ヶ月時点で母親が子どもの情報提供に対して模倣をしていることが，27ヶ月時

点で子どもが母親の情報請求を受けて情報提供をしている割合と負の関係性を見せているが，母親が子どもの模倣をすることが直接的に情報請求を受けての子どもの情報提供に妨害的に働いているとは考えにくい。母親が模倣をする傾向と関連した子ども側の要因，母親側の要因が何らかの影響を与えていると考えられるが，現時点ではその要因が何かは明らかではない。

20ヶ月時点での会話パターンと27ヶ月時点での子どもの言語発達との関係

20ヶ月時点での会話のパターンと27ヶ月時点での子どもの言語発達との関係は，20ヶ月時点での子どもの言語発達をコントロールして検討すると，総じて明確な関連性は見られなかった。20ヶ月時点での子どもの情報提供に先行して母親が情報請求している割合と，27ヶ月時点での子どもの産出語彙数に有意水準に近い関連性が見られたが，多くの偏相関係数を算出する中で得られた結果であり，偶然の可能性は否定できない。ただ，有意水準には至らないまでも，20ヶ月時点での母親の情報請求と子どもの情報提供という発話連鎖パターン，子どもの情報提供に対する母親の精緻化情報提供は，27ヶ月時点での子どもの言語発達水準に正の関連性を示している。本研究は，因果を推定するには研究協力者母子が少なく，また，測定した発話数も多くないので，有意な関連性は見出しにくかったと考えられる。今後これらの発話連鎖パターンと子どもの言語発達の関連性について再検討をする必要がある。

引用文献

Bruner, J. S. (1981). Intention in the structure of action and interaction. *Advances in Infancy Research*, 1, 41-56.

Murase,T., Dale,P.S., Ogura,T., Yamashita,Y., & Mahieu,A. (2005). Mother-child conversation during joint picture book reading in Japan and the USA. *First Language*, 25, 197-218.

村瀬俊樹・マユーあき・小椋たみ子・山下由紀恵・Dale, P. S. (1998).絵本場面における母子会話：ラベリングに関する発話連鎖の分析．*発達心理学研究*, 9, 142-154

Ninio, A., & Bruner, J. (1978). The achievement and antecedents of labelling. *Journal of Child Language*, 5, 1-15.

小椋たみ子・山下由紀恵・村瀬俊樹(1991) 初期言語発達インベントリー信頼性の検討，*島根大学教育学部紀要*, 25, 17-31.

付　　記

本研究は，科学研究費補助金基盤研究(C)(2)（課題番号：08837012，研究代表者：村瀬俊樹）の補助を受けた。